

「屈原と楚辞」第一回 「概要」テキスト

屈原^{くつげん}の強烈な愛国の情から出た詩は、楚の詩を集めた「楚辞」の中で代表とされ、その中でも「離騷」は後世の愛国の士から特に愛された。

「屈原は王がひとのことばを聴きわけける耳がなく、讒言し、へつらう者が明察をおおいかくし、よこしまな者が公平をそこない、正しき者が容れられぬのを中心からくんだ。それゆえ憂愁し、ふかく思いをめぐらして、『離騷』を作った。離騷とは、憂いにとりつかれる意である。」

（史記 屈原・賈生列伝 第二十四）

「楚辞」は中国戦国時代の楚地方に於いて謡^{うた}われた詩の様式のこと。またはそれらを集めた詩集の名前である。全十七卷。その代表として屈原の「離騷」が挙げられる。北方の「詩経」に対して南方の「楚辞」であり、共に後代の漢詩に流れていく源流とされる。また賦^ふの淵源とされ、合わせて辞賦と言われる。

何故「屈原と楚辞」か

1. 北方の「詩経」に対して南方の「楚辞」であり、共に後代の漢詩の源流とされる。
2. 「楚辞」における感性や訓話は、日本人の感受性・思考方法の一つの源流を示していると思われる。
3. 楚の屈原を取り巻く歴史は、中国戦国時代の一つの大きな転換点であり、「史記」のなかでも、手に汗にぎる出来事の連続である。

「屈原と楚辞」、全四回の項目

1. 第一回：屈原と楚辞の概要
 - ① 屈原の紹介
 - ② 楚辞の概要
 - ③ 漁父辞
 - ④ 漁父辞を典故とする詩の紹介

2. 第二回： 楚辞の主要詩の紹介（「離騷」は第三回、四回）

① 九歌

② 天問

③ 九辯

④ 招魂

⑤ 各詩を典故とする詩の紹介

3. 第三回： 離騷の概要と同前半

① 離騷の概要

② 離騷の第一段～九段

4. 第四回： 離騷の後半と後世への影響

① 離騷の第十段～十六段

② 離騷の後世漢詩への影響

引用・参考図書

- ・ 「史記 屈原・賈生列伝第二十四」（かせい）（岩波文庫）
- ・ 星川清孝「楚辞」（新釈漢文大系 明治書院）
- ・ 藤野岩友「楚辞」（集英社）
- ・ 小南一郎「楚辞」（岩波文庫）
- ・ 牧角悦子まさすみ「詩経・楚辞」（角川ソフィア文庫）、
- ・ 村山吉廣「詩経の鑑賞」（二玄社）
- ・ 白川静「中国の古代文学（1）―神話から楚辞へ」（中公文庫）
- ・ 宇野直人「漢詩の歴史」（東方書店）
- ・ 宇野直人・江原正士「漢詩を読む①」（「詩経」、屈原から陶淵明へ）（平凡社）
- ・ 矢田尚子「楚辞「離騷」を読む」（東北大学出版）
- ・ 矢田尚子「楚辞『漁父』の解釈をめぐる」（東北大学機関レポジトリ）
- ・ Wikipedia 屈原、楚辞、
- ・ ネット 離騷（黒須重彦訳）
- ・ ネット 中國哲學書電子化計劃、

屈原

屈原（BC 三四三―二七八）は、中国戦国時代の楚の政治家、詩人。姓は芈^び、氏は屈。諱^{いみな}は平または正則。字が原。政治家としては秦の張儀^{ちやうぎ}（？・BC 三〇九）謀略を見抜き、踊らされようとする懷王^{かいおう}（在位 BC 三二八―二九八）を必死で諫めたが受け入れられず、楚の将来に絶望して入水自殺した。

注）張儀は、中国戦国時代の縦横家・政治家。蘇秦と共に縦横家の代表的人物とされ、秦の宰相として蘇秦^{そしん}の合従策を連衡策で打ち破り、秦の拡大に貢献した。

屈原は公室系の宗族（広義の王族）の一人であり、屈氏は景氏・昭氏と共に楚の王族系でも最高の名門の一つであった（これは三閭^{さんりやう}と呼ばれる）。家柄に加えて博聞強記で詩文にも非常に優れていたために懷王の信任が厚く、令尹（宰相）に次ぐ地位の左徒となった。

当時の楚は、西の秦とどう向き合っていくかが主要な問題であった。これに対する対応策は、西にある秦と同盟することで安泰を得ようとする親秦派（楚における連衡説）と、東の斉と同盟することで秦に対抗しようとする親斉派（楚における合従説）の2つ分かれていた。屈原は親斉派の筆頭であった。屈原の政治能力は当時の楚では群を抜いていたが、非常に剛直な性格のために同僚から嫉妬^{しつと}されて讒言を受け、王の傍^{そば}から遠ざけられ同時に国内世論は親秦派に傾いた。

屈原は秦は信用ならないと必死で説いたが、受け入れられない。屈原の心配どおり秦の謀略家張儀^{ちやうぎ}の罠に懷王^{かいおう}が引っかかり、楚軍は大敗した（史記・張儀列伝 第十に詳しい）。丹陽、藍田の大敗後、一層疎んぜられて公族子弟の教育役である三閭大夫^{さんりやうだふ}へ左遷され、政權から遠ざけられた。

秦は懷王に婚姻を結ぼうと持ちかけて秦に来るように申し入れた。屈原は秦は信用がならない、先年騙されたことを忘れたのかと諫めたが懷王は親秦派の公子子蘭^{しらん}に勧められて秦に行き、秦に監禁されてしまった。

王が捕らえられた楚では襄王^{じやうおう}（在位 BC 二九八―二六三）を立てた。襄王の令尹（丞相）に屈原が嫌いぬいた子蘭^{しらん}がなったために、更に追われて江南へ左遷された。その後、秦により楚の首都郢^{えい}が陥落したことで楚の将来に絶望して、石

を抱いて汨羅江（洞庭湖に注ぐ長江右岸の支流）に入水自殺した。

（「史記」屈原・賈生列伝、他）

（参考）粽の由来

粽は、中国から伝来したものである。その由来は、楚国の屈原の死を供養する為のものだったと言われている。屈原の命日の5月5 日になると、河に身を投げた屈原の死を嘆いた人々は、米を詰めた竹筒を投じて霊に捧げたが、河に住む龍に食べられてしまうので、龍が嫌う葉で米を包み、五色の糸で縛ったものを流すようになった。

楚辞

楚辞^{そじ}は中国戦国時代の楚地方に於いて謡われた詩の様式のこと。またはそれらを集めた詩集の名前である。全二卷。その代表として屈原の「離騷^{りそう}」が挙げられる。北方の「詩経」に対して南方の「楚辞」であり、共に後代の漢詩に流れていく源流とされる。また賦^ふの淵源とされ、合わせて辞賦と言われる。

成立

書物としての「楚辞」の成立は前漢末期の劉向の手によるものであるが、これは散逸しており、現行の「楚辞」はそれに後漢の王逸^{おういつ}が自らの詩を合わせた「楚辞章句」が現在伝わる最古の「楚辞」である。尚、北宋の洪興祖^{こうこうそ}の「楚辞補註」が「楚辞」を読む際の基本であり、他に朱熹^{しゆき}による「楚辞集註^{しじしゆ}」がある。

楚の歌としての楚辞

古代、楚と呼ばれた国とその周辺、最近では「楚文化圏」という風にも呼ばれるが、その楚文化圏には、他の国々とは異なる独自の文化が存在した。それは、死者の靈魂を、とりわけ厚く祀^{まつ}る文化でした。古い文献を見ると、楚の人々は、死者の靈魂の存在を厚く信じ、やり過ぎだと思ふほどの重厚な祭祀^{さいし}（淫祀）を行う、と書いてある。そして、その神靈祭祀の場においては、歌と踊り、そして様々な楽曲が神々に奉^{ささ}げられた、とも書いてある。

楚の地方は、周王朝に滅ぼされた殷王朝の末裔^{まつえい}たちが、その文化財産と一緒に流れ込んできた土地でした。中央の周王朝からは野蛮人「蛮夷^{ばんい}」と呼ばれたその文化は、実は質的には周王朝を凌^{しの}ぐ、極めて洗練度の高いものでした。長江やその支流である沅水^{げんすい}・湘水^{しやうすい}に囲まれた豊かな水資源の恩恵を受けて、肥沃^{ひよく}な大地と自然の要害に守られた楚の地方は、北方の黄河流域とは異なる独自の文化を生み育^{はぐく}んでいた。

殷王朝の流れを引き継ぐ洗練された文化と、重厚な死者儀礼とが合体した楚文化圏では、人間の死後の世界、魂の天上世界への昇仙を、人々は様々な様式で表現した。それは、一つには物語となり、一つには絵画となり、やがて歌舞劇として王朝祭祀に供されるようになる。そのような中で生まれたのが楚の歌としての楚辞でした。

私見であるが、中国から文字としてもたらされた、日本人の精神的バックボーンは

「論語」に代表される漢学、日本人の心情的バックボーンは「楚辞」と思われる。

内容

以下の十七卷。「楚辞」のうち最も重要なのは、最初の三篇である、「離騷」、「九歌」、「天問」である。（ ）で示すのは、王逸の言うところの作者。

離騷（屈原）

「離騷」篇は、苦悩する魂の遍歴の物語である。一人の主人公（屈原）が登場し、正しい血筋を受け継ぐ高貴な生まれであり、かつ高潔な魂を持っていたにも関わらず、讒言を信じ自分を理解しない君主に冷遇され、世間の汚辱に堪えず、この世に見切りをつけて天上世界へ旅に出る。

後半は、天界を遊行する主人公が、神話の世界の中で理想を追求して失敗する。そして最後に、更なる高みを目指して旅立とうとするところで、この長編の物語は終る。そこにあるのは、滅びゆくものの美しさである。
三七三句の長編の詩。

九歌（屈原）

神々との饗宴きやうえんの歌である。天の唯一絶対神である「東皇太一」をはじめとして、天上界・自然界の神々を祭るうたが集められている。

天問（屈原）

天に対する問いかけである。天地創造のはじめから、神話の世界に語られるいにしえの物語、そして人間世界の道理から地理歴史の知識に至るまで、あわせて一七二の問いが発せられる。

九章（屈原）

屈原の述志の九篇の詩であり、詩句形式も思想も、大体「離騷」と同様である。第5章「懷沙」では、「節操を守り、義に死すだけである」と述べている。「史記屈原・賈生列伝」に採録されており、この賦の後、石を抱いて汨羅べきらに身を投じて死んだと記されている。

遠遊（屈原）

屈原は放逐されて、悲嘆のはてに、宇宙を達観し、世俗の卑狭をいやしみ、年寿の長くないのを悼いたみ、長生不死の仙人となって、宇宙の極に遊び、永遠の世のはてを見尽したいと思う心を述べた。

卜居（屈原）

屈原が心の迷いを決するため、太卜に居を卜ってもらうとみせかけて、それを偽りて世人を戒めたものである（朱熹）。

漁父（屈原）

「漁父辞」とも呼ばれる。老荘風の漁父と真面目で世を憂えている屈原の対話を記す。史記の屈原・賈生列伝にも記述あり。

九辯以下の諸篇は、これらの楚の歌の詠いぶりを踏まえて、その継承者たちが歌いついでいったものである。

九辯（戦国楚の宋玉）

宋玉が屈原の心になって、深くその意を哀れに思い、屈原の辞句を用いて、屈原のために作ったものである。九辯は楚辞の中でもすぐれた作品であると言われている。

招魂（宋玉）

逃れ去る魂を招きよせる歌。体から抜け出した魂を招きよせる歌。体から抜け出した魂に向って、その行先が苦難に満ちていることをうたい、「帰っておいで」と呼びかける歌である。日本にも古くから残る民謡「ほたるこい」の原型である。

大招（屈原あるいは景差）、惜誓（前漢の誼）、招隱士（淮南小山）、七諫（東方）、哀時命（嚴忌）、九懷（前漢の王褒）、九歎（劉向）、九思（後漢の王逸）

詩の様式としての楚辞は六言ないし七言で謡われ、元は民謡であり、その源流は巫の歌にあると言われている。中国北方の文学に対して非常に感情が強く出ており、音律を整えるためのものである兮の字が入ることが特徴（文章としての意味は無い）。

（新釈漢文大系「楚辞」、「詩経・楚辞」一六六頁）

注) 宋玉と「高唐賦」

宋玉そうぎよく

宋玉（生没年不詳）は、戦国末期（紀元前3世紀頃）の楚の文人。屈原の弟子とも後輩ともいわれ、「屈宋」と併称される。

宋玉の作品として伝えられるものは、『楚辞章句』の「九弁」「招魂」。『文選』の「高唐賦」「神女賦」など。

高唐賦・巫山神女の伝承

楚の宋玉の「高唐賦」（『文選』所収）序に、楚の懷王の先王が高唐（楚の雲夢沢にあった台館）に遊んだ際、疲れて昼寝していると、夢の中に「巫山の女むすめ」と名乗る女が現れて王の寵愛を受けた、という記述がある。

彼女は立ち去る際、王に「私は巫山の南の、険しい峰の頂に住んでおります。朝は雲となり、夕べは雨となり、朝な夕な、この陽台のもとに参るでしょう」（妾在巫山之陽、高丘之岨、旦為朝雲、暮為行雨。朝朝暮暮、陽台之下。）と告げた。

この故事から、「巫山の雲雨」あるいは「朝雲暮雨」は、男女が夢の中で契りを結ぶこと、あるいは男女の情交を意味する故事成語として用いられるようになった。

清平調詞 三首 其の二 李白

一枝紅艷露凝香

一枝の紅艷 露香を凝らす

雲雨巫山枉斷腸

雲雨 巫山 枉むなしく断腸

借問漢宮誰得似

借問す 漢宮 誰たか似るを得たる

可憐飛燕倚新粧

可憐の飛燕ひえん 新粧に倚よる

(訳)

一本のあでやかな牡丹の花、その上に置く露は花の香りを結晶させたよう。これに比べると、雲となり雨となった巫山の神女も、人の心をむなしくかきむしるだけである。ちよつとおたずねするが、別嬪べっぴんぞろいの漢の後宮で、誰が楊貴妃に比べられるだろうか。それは愛らしい趙飛燕ちょうひえんが、お化粧したばかりの美貌びぼうを誇る姿であろうか。

(李白一〇〇選 一一三頁)

(参考) 詩経

中国最古の詩集。前九世紀から前七世紀にかけての詩三〇五編を収める。伝承によれば、孔子が門人の教育のために編纂したもの。「風」「雅」「頌」に大別される。「風」はさらに十五の「国風」に分れて黄河沿いの国々の民謡を主とし、「雅」は「大雅」と「小雅」に分れ、周の朝廷の宴会に歌われたもので、建国伝説を詠んだ長編叙事詩を含む。「頌」は「周頌」「魯頌」「商頌」に分れ、祖先の廟前で奏せられた神楽(かぐら)と考えられる。詩の形式は四言で一句、四句で一章となるのが基本。

・ 詩経は、中国最古の詩篇である(詩三百篇)。その構成を以下に示す。

① 各地の民謡を集めた「風」… 諸国の民謡であり民草の心情が反映したもの。
「国風」(一六〇篇)は、周南(関雎、桃夭他十一篇)、召南(甘棠他十四篇)、邶(一九篇)、鄘(二〇篇)、衛(一〇篇)(注:邶・鄘・衛は本来すべて衛の国の歌)、王(二〇篇)、鄭(二一篇)、齊(十一篇)、魏(七篇)、唐(一二篇)、秦(黄鳥他一〇篇)、陳(二〇篇)、檜(四篇)、曹(四篇)、豳(七篇)の一五の国と地域の民謡を収める。諸国の民謡であり民草の心情が反映したもの。

② 貴族や朝廷の公事・宴席などで奏した音楽の歌詞である「雅」… 天下の政を歌った朝廷の音楽。

「雅」はさらに「小雅」(八〇篇)と「大雅」(三一篇)に分かれる。

「雅」とは正なり。王政の由って興廃する所を言う。正に大小あり。故に「大雅」あり、「小雅」あり(孟詩大序)。

「小雅」は、鹿鳴、南有嘉魚、鴻鴈、節南山、谷風、甫田、魚藻の七什編、「大雅」は、文王(文王他一〇篇)、生民(二〇篇)、蕩(十一篇)の三什編によって構成される。

③ 朝廷の祭祀に用いた廟歌の歌詞である「頌」: 神前において祖先の功績をたたえるもの。

「頌」(四〇篇)は、周(三一篇)、魯(四篇)、商(五篇)の三頌編に分かれる。

- ・ 論語・大学・中庸でも多く引用されている。

論語に述べられているように、君子の教養であり情操教育の手段でもあった。「子曰く、小子、何ぞ夫の詩を学ぶこと莫きや。詩は以て興すべく、以て観るべく、以て群すべく、以て怨むべし。邇くは父に事え、遠くは君に事え、多く、鳥獸草木の名を識る。」（陽貨一七―九）

周南・関雎（みさこの歌、祝婚歌）

- ・ 関雎たる雎鳩は 河の洲に在り 窈窕たる淑女は 君子の好逑
- ・ 参差たる荇菜は 左右に之を流む 窈窕たる淑女は 寤寐に之を求む：
- ・ 訳（「詩経の鑑賞」）

声鳴き交すみさこ鳥 河の中洲にたわぶれぬ 心やさしくみめもよき
乙女ぞわれのよき伴ぞ 心やさしくみめもよき 乙女ぞわれ
長き短き水草の 荇菜を摘むは右左
の恋の主

周南・桃夭（祝婚歌）：「詩経」の詩三〇五篇の中で一番有名なのは、おそらくこの詩。

- ・ この詩のテーマは、結婚のめでたさを寿ぐことにある。
- ・ 桃の夭夭たる、灼灼たる其の華あり之の子于に帰がば 其の室家に宜しからん
- ・ 桃の夭夭たる、蕢たる其の実あり 之の子于に帰がば 其の室家に宜しからん
- ・ 桃の夭夭たる、其の葉蓁蓁たり 之の子于に帰がば 其の家人に宜しからん
- ・ 訳（「詩経の鑑賞」）

桃は若いよ 燃え立つ花よ この娘嫁きやれば ゆく先よからう
桃は若いよ 大きい実だよ この娘嫁きやれば ゆく先よからう
桃は若いよ 茂った葉だよ この娘嫁きやれば ゆく先よからう

鹿鳴之什・鹿鳴：古来、朝廷で招待者と饗宴を開いた時に演奏されてきた曲。（第三節（最終節））

- ・ 呦呦たる鹿鳴 野の芩を食う 我に嘉賓有り
- ・ 瑟を鼓し琴を鼓す 瑟を鼓し琴を鼓し 和樂して且つ湛しむ
- ・ 我に旨酒有り 以て嘉賓の心を燕楽せん

・ 訳（「詩経の鑑賞」）

さおしか（牡の鹿）は友鳴きよびて よもぎ食む われにめでたきまろうど
（立派な客人）あり

瑟かなで 琴ひきて 楽しみははてもなし
われにうま酒あり まろうどの心樂しめやすめらん

文王之什・文王

・ 文王上に在り 於天に昭らかなり 周は旧邦なりと雖も 其の命は維れ新
たなり

有周顒らかならざらんや 帝命時ならざらんや 文王陟降して 帝の左右
に在り

・ 訳（「詩経の鑑賞」）

・ 天にまします文王 於その徳天にかがやき給う 周は旧き邦なれども 受
けし天命こそ新たなれ

げにかがやかならずやわが周 げにいみじからずや天の命 文王の御魂は
天かよい 天帝のみ側に在します

漁父（ぎよほ）

（高校の漢文教材で「漁父辞」として、採り上げられている）

原文

屈原既放、游於江潭、行吟沢畔。顔色憔悴、形容枯槁。漁父見而問之曰、「子非三閭大夫与。何故至於斯。」屈原曰、「舉世皆濁、我独清。衆人皆醉、我独醒。是以見放。」

漁父曰、「聖人不凝滯於物、而能与世推移。世人皆濁、何不渥其泥、而揚其波。衆人皆醉、何不餽其糟、而歎其醜。何故深思高举、自令放為。」

屈原曰、「吾聞之、『新沐者必彈冠、新浴者必振衣。』安能以身之察察、受物之汶汶者乎。寧赴湘流、葬於江魚之腹中、安能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃乎。」

漁父莞爾而笑、鼓枻而去。乃歌曰、

滄浪之水清兮 可以濯吾纓

滄浪之水濁兮 可以濯吾足

遂去、不復与言。

書き下し文

屈原既に放たれて、江潭に遊び、行く沢畔に吟ず。顔色憔悴し、形容枯槁せり。

漁父見て之に問うて曰く、「子は大夫に非ずや。何の故に斯に至るや」と。

屈原曰く、「世を挙げて皆濁りて、我独り清めり。衆人皆酔ひて、我独り醒めたり。是を以て放たる」と。

漁父曰く、「聖人は物に凝滞せずして、能く世と推移す。世人皆濁らば、何ぞ其の泥を渥して、其の波を揚げざる。衆人皆酔はば、何ぞ其の糟を餽ひて、其の醜を歎らざる。何の故に深く思ひ高く挙がりて、自ら放たれしむるを為す」と。

屈原曰く、「吾之を聞く。『新たに沐する者は必ず冠を弾き、新たに浴する者は必ず衣を振ふ』と。安くんぞ能く身の察察たるを以て、物の汶汶たる者を受けんや。寧ろ湘流に赴きて、江魚の腹中に葬らるとも、安くんぞ能く皓皓の白きを以てして世俗の塵埃を蒙らんや」と。

漁父莞爾として笑ひ、枻を鼓して去り、歌つて曰く、

「滄浪の水清まば、以て吾が足を濯ふ可く、

滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯ふ可し」と。

遂に去つて、復た与に言はず。

現代語訳

屈原は追放されて、湘江の淵や岸をさまよい、歩きながら沢のほとりで歌を口ずさんでいた。顔色はやつれはて、その姿は痩せ衰えている。老人の漁師が彼を見るとたずねて言うには、「あなたは三閭大夫ではありませんか。どうしたわけで、こんなことになったのですか。」と。屈原は言うには、「世の中がすべて濁っている中で、私だけが清らかである。人々すべて酔っている中で、私だけが（酔いから）さめている。こういうわけで、追放されたのだ。」と。

老漁師が言うには、「聖人は物事にこだわらず、世間と共に移り変わるのです。世の人が皆濁っているならば、なぜ（ご自分も一緒に）泥をかき乱し、その濁った波を高くあげようとしなのですか。人々が皆酔っているなら、なぜ（ご自分も）その酒かすを食べて、薄い酒を飲もうとしないのですか。どうして深刻に思い悩み、お高くとまって、自分から追放されるようなことをなさるのですか。」と。

屈原が言うには、「私はこう聞く。『髪を洗ったばかりの者は、必ず冠の塵を弾き（よごれを払ってから被り）、入浴したばかりの者は、必ず衣服をふるって（塵を落として）から着るものだ』と。どうして私自身の潔白な身に、汚れたものを受けられることができるだろうか。（いや受けいれない。）（それなら）いつそのこと湘江の流れに行つて（身を投げて）、川魚の（えさとなつて）腹の中に葬られても、どうして純白の身を世俗の塵やホコリを受けられるだろうか。」と。

老漁師はにっこりと笑い、（ふなばたを）櫂で叩きながら漕ぎ去った。そしてそのとき、こう歌った。

滄浪の水が澄んでいるのなら、（大切な）冠の紐を洗おう。
滄浪の水が濁っているのなら、（汚れた）私の足を洗おう。
とうとうそのまま去って、二度と語り合うことがなかった。

（ネット「高校古文・漁父辞」を一部修正）

【語釈】

○枯槁：やせて生氣のない。○三閭大夫：屈原の前官名。○凝滯：執着して融通がきかぬ。其の醜を歎：そのうす酒（したみ酒）をすすする。○察察：潔白。○汶汶：暗くけがれたさま。○皓皓：白い形容。貞淑に喩える。○莞爾：にっこりと笑う。○枻：かじ。○兮：楚の歌謡に独特の助字で、意味はなく、旋律に合わせて音を引き延ばす役割をする。○滄浪の水清：世に道が行われる喩え。○水濁：道無く乱れた世の喩え。

注）史記の屈原・賈生列伝に、漁父との問答の記述あり。

孟子の離婁章句上8に、「滄浪の歌」についての孔子と弟子の問答の記述あり。

漁父辞を典故とする詩の紹介

「漁父」全体の趣旨は、屈原の高潔さを讃えることにあり、後世の詩人達も「人生に於ける高潔さ」を求めた詩のなかで、「俗世に汚されることのない己の強い信念を高らかに宣言する」時にしばしば引用されている。

帰園田居五首 其五 園田の居に帰る五首 其の五 東晋・陶潜^{とうせん}

悵悵獨策還^{ちやうごん} 悵悵して独り策つきて還る

崎嶇歷榛曲^{きく} 崎嶇として榛曲を歴^ふ

山澗清且淺^{さんかん} 山澗清く且つ浅し

可以濯吾足^{あら} 以て吾が足を濯うべし

漉我新熟酒^こ 我が新たに熟せる酒を漉し

隻鷄招近局^{せきけい} 隻鷄もて近局を招く

日入室中闇^{くろ} 日入りて室中闇し

荊薪代明燭^か 荊薪もて明燭に代う

歡來苦夕短^ゆ 歡び来りて夕べの短きを苦しみ

已復至天旭^す 已に復た天旭に至る

【語釈】

○崎嶇：山道などの険しいさま。○榛曲：草やぶのある曲がり道。○山澗：山と山に挟まれた谷川。○苦夕短：「古詩十九首」に、「昼は短くして夜の長きに苦しむ、何ぞ燭を秉^とって遊ばざる」とある。○天旭：夜が明けて明るくなること。

【通釈】

生のはかなさを恨みながら独り杖をついて帰って行く。草やぶの茂った険しい曲がり道を通ると、山あい谷間の水が浅く清らかに流れていて、足を洗うのにちょうどいい。

家に帰るとできたての濁り酒を漉し、鶏を一羽料理して隣近所の人々を招く。日が暮れて部屋がぐらくなると、木の枝をくべて明るいうそくの代わりにする。喜びが極まって夜の短いのに悩み、気がつくともうすでに夜が明けている。

(陶淵明詩選 一二五頁)

彭沢の県令を辞職してふるさとの潯陽に隠棲してから以後、陶淵明は死ぬまで仕官はしなかった。俗世間との交わりを断ち、近隣の人びとに接し、田園の生活を謳歌している。

天末懷李白

天末^{てんまつ}にて李白を懷う

杜甫

涼風起天末

涼風 天末に起る

君子意如何

君子 意^い如何^{いかん}

鴻雁幾時到

鴻雁^{こうがん} 幾時か到る

江湖秋水多

江湖^{こうこ} 秋水多し

文章憎命達

文章は命の達するを憎み

魑魅喜人過

魑魅^{ちみ}は人の過^すぐるを喜ぶ

應共冤魂語

応に冤魂^{えんこん}と共に語らんとして

投詩贈汨羅

詩を投じて汨羅^{べきら}に贈るべし

【通釈】

涼しい風が天の果ての秦州に吹きわたるころ、あなたは今、どんな心境でおられることか。あなたからの雁の便りはいつやってくることだろうか。あなたがいる水郷地帯では秋の水があふれていることであろう。古来、文学というものは作者の運命の栄達することを憎むのであろうか、あなたの流されて行く土地では、ばけものどもが人の通りすぎることを喜んで待っていることであろう。今あなたは、きつと無実の罪に死んだ屈原の魂とともに語りあおうとして、汨羅の淵に詩を投げこんで贈っておられるのではあるまいか。

天のはて（天末）の秦州で、李白を懷かしんでの作。

安祿山の乱のさい、李白は南方に政府を樹立しようとした永王璘^{りん}（玄宗の第十六皇子）の幕僚となったため反逆罪に問われ、至徳二年（七五七）、潯陽（江西省九江市）の獄につながれ、乾元元年（七五八）、夜郎（貴州桐梓県）に流されたが、翌年の春、巫山^{ふさん}（四川省）まで来たところで放免された。しかし杜甫は、李白が放免されたことを知らなかったと思われる。

（杜甫一〇〇選 一六四頁）

龍門下作

龍門の下にて作る

白樂天

龍門澗下濯塵纓

龍門澗下 塵纓を濯い

擬作間人過此生

間人と作って此の生を過ごさんと擬す

筋力不將諸処用

筋力は將て諸処に用いず

登山臨水詠詩行

山に登り水に臨み 詩を詠じて行かん

【通釈】

龍門山の下の谷で塵に汚れた冠のひもを洗い、閑人となってこの生涯を過ごそうと思う。種々雑多なことに体力を消耗させることは避け、山に登り水に臨み、詩を詠じて気ままに行楽しよう。

白樂天五十八歳の作。官僚生活をしながらも隠棲しているさまを、洛陽の南、龍門山で詠う。この頃には「中隱」という詩もある。さしずめ、この「龍門下作」は、中隱を実行する詩といえよう。

（白樂天一〇〇選 二七五頁）

漁父

唐

汪遵

（「七言絶句ここから一步」上三七頁）

棹月眠流處處通

月に棹さし流れに眠り 処々通ず

綠蓑葦帶混元風

綠蓑 葦帶 混元の風

靈均說盡孤高事

靈均は説き尽す 孤高の事

全與逍遙意不同

全て逍遙と意同じからず

【語釈】

○混元風…原義は「仙風道骨」を指し、「世俗を超越した優れた人の容貌」のこと。

○靈均…屈原の字。戦国時代楚の王族（前三四三？～前二七八？）。

○孤高…ひとり世俗から離れて超然としていること。

○逍遙…俗事を離れて気ままに生活を楽しむこと。

【通釈】

月に棹さし、流れに眠りあちこちに行く。緑の蓑と葦の帯をしめ、世俗を越えた容貌をしている。ひとり世俗から離れて超然とした生き方は屈原が説き尽した事であるが、すべて俗事を離れてきままな生活を楽しむことと意は同じではない。

「漁父辞」を読むとこの詩を思い出す。

江雪

柳宗元（中唐、七七三～八一九）

千山鳥飛絶

千山 鳥飛ぶこと絶え

万径人蹤滅

万径ばんけい 人蹤滅じんしやうめつす

孤舟簑笠翁

孤舟こしゅう 簑笠さりゅうの翁おう

独釣寒江雪

独ひとり釣る 寒江かんこうの雪

【通釈】

どの山々にも飛ぶ鳥の影は絶え、どの小みちにも人の足跡は消えた。
ただ一そうの小舟、簑笠（みのかさ）をつけた老人。老人は、一人で雪の降
りしきる川面に釣り糸を垂れている。

この詩は、孤独な作者の境遇と、孤独にひたすら耐える作者の心とを一枚
の画幅に託してうたったもの。

（漢詩鑑賞辞典四〇七頁）